

J.S. バッハの トーマス・カントル就任をめぐって

— 300 周年を記念して —

木 村 佐千子

0. はじめに

2023 年は、バッハ Johann Sebastian Bach (1695–1750) がライプツィヒ市音楽監督、トーマス・カントルに 1723 年に就任して 300 周年である。バッハは 38 歳だった 1723 年 5 月 22 日にライプツィヒに転居し、1750 年 7 月 28 日に 65 歳で亡くなるまでライプツィヒを本拠地とした。27 年あまりを過ごしたライプツィヒは、バッハが生涯で最も長く暮らした都市である。今年、ライプツィヒでは様々な記念行事が行われており、バッハ祭 (Bachfest) 期間中の 2023 年 6 月 15～17 日には、1723 年のトーマス・カントル交代をテーマとした学会も開催された¹⁾。ライプツィヒにはバッハ資料館 (Bach-Archiv) があり、バッハ研究の重要な拠点である²⁾。ライプツィヒ観光協会 (Leipzig Tourismus und Marketing GmbH) のウェブサイトではライプツィヒにゆかりのある作曲家を 7 名挙げているが、その最初に紹介されているのがバッハとトーマス教会合

1) この学会発表はオンライン会議システムを使って無料で中継され、日本でも視聴することができた。https://www.bach300.de/wissenschaftliche-konferenz/ (本稿の URL はすべて 2023 年 8 月 8 日最終確認)

2) „300 Jahre Bach in Leipzig“ という枠組みのなかで様々な催しを行っており、新たな Bach Digital Smart というアプリも今年公開された。https://www.bach300.de/bach-webapp/

唱隊であり³⁾、ライプツィヒ市にとってもバッハの存在は大きいと言えよう。本稿では、バッハのライプツィヒ着任の頃に焦点をあて、選出の経緯、着任当初のこと、バッハの転職の理由とその結果についてまとめる。バッハがトーマス・カントルに着任するまでの事情は単純ではなく、このことに関する既存文献は少なくないが⁴⁾、今年出された新聞記事や雑誌特集の内容もとり入れ、まだ日本語に訳出されていないドイツ語の一次文献を紹介するなどして深めたい。

1. トーマス・カントル選出

ライプツィヒのトーマス教会付属学校（以下、トーマス学校）は1212年に設立された伝統ある教会学校で⁵⁾、生徒である少年たちが礼拝における音楽奉仕にたずさわるため、音楽教育に力を入れていた。18世紀はじめ頃、人口約3万人だったライプツィヒ市内には、もうひとつの主要教会（Hauptkirche）ニコライ教会の付属学校もあったが、こちらは通常の学科の教育を中心に行っており、学校教育の重点に違いがあった。トーマス・カントルは、トーマス学校の生徒たちに音楽教育を行い（ラテン語授業も担当するのが建て前であった）、市内4つの教会の礼拝に音楽を提供するのが主な仕事であった⁶⁾。

3) <https://www.leipzig.travel/entdecken/musik-und-kultur-in-leipzig/musik-in-leipzig/leipziger-komponisten>

4) たとえば Siegele 1983, Wolff 1991, Siegele 1997, Sailer 2000, Schulze 2017, Glöckner 2018 や伝記中の記述等。本稿は、2023年7月16日に東京・オペラシティで行われたバッハ・コレギウム・ジャパン第156回定期演奏会公演プログラム34~38頁に掲載された筆者のエッセイ「バッハのトーマス・カントル就任300周年」に大幅に加筆した。

5) 最初はカトリックの学校だったが、16世紀の宗教改革を経てルター派の教育が行われるようになり、現在は市立学校となっている。1540年にルター派の教区監督 Superintendent が置かれたことが知られる。Glöckner 1999, S. 51.

6) 最初はトーマス教会のみに音楽奉仕を行っていたが、1565年からニコライ教会にも合唱隊を派遣するようになった。Glöckner 1999, S. 52. 1699年から新教会 Neue Kirche、1712年からペーター教会 Peterskirche でも一般会衆向けの礼拝が行われるようになり、トーマス学校の生徒たちは4か所に分かれて音楽活動をするようになった。

1722年6月5日、1701年からトーマス・カントルを務めていたクーナウ Johann Kuhnau (1660-1722) が亡くなった。クーナウは1682年からライプツィヒ大学で法学を学び、1684年からトーマス教会オルガニストとなった。1701年にトーマス・カントルに着任するまで弁護士として活動したほか、文筆活動も行い、出版したクラヴィーア曲集はよく売れたという。クーナウのクラヴィーア曲集としては、『新しいクラヴィーア練習曲集 Neuer Clavier Übung⁷⁾』(1689、1692年)、『新鮮なクラヴィーアの果実 Frische Clavier Früchte』(1696年)、『聖書ソナタ集 Musicalische Vorstellung einiger Biblischer Historien』(1700年)があり、バッハがライプツィヒで出版した4冊の『クラヴィーア練習曲集』は、クーナウの1689、1692年の出版曲集のタイトルを参考にしたと考えられている。

クーナウが亡くなった後、間もなくライプツィヒ市参事会は後任選びを始めた。最初に白羽の矢が立ったのは、テレマン Georg Philipp Telemann (1681-1767) である。1722年7月14日の市参事会の議事録には、下のような記載がある。(以下、現代と異なる綴りもあるが、引用元文献の記述に従う。)

Die Cantorat-Stelle bey der Schule zu St. Thomas sey zu ersezen, dazu sich angegeben

1. Johann Friedr. Fasch
2. Georg Balthasar Schott
3. Joh. Christian Rolle,
4. Georg Lencke
5. Johann Martin Steindorff
6. Georg Philipp Telemann,

た。Glöckner 1999, S. 59. そのほかに、重要祝日には大学教会 Universitätskirche St. Pauli の礼拝でも演奏を行った。

7) 現在の語尾変化・綴りでは Neue Klavierübung。(第2巻のオリジナル印刷譜表紙は Neuer Clavier Übung。)

der letztere sey schon bekant, und wolle Er sich wegen der Schularbeit mit einem von denen untern Collegen vergleichen.

Tit. Herr Appellat. Rath Plaz

Es habe der Cantor in denen obern Claßen mit zu informiren, welches ihm nur in der person Telemanns {der dergleichen nicht zu übernehmen gesonnen} bedenklich sey u. müße man wenigst hören, wie er die informaton einzurichten u. sich diesfals zu vergleichen gedencke, wegen seiner geschickligkeit in der Music wäre er bekant.

Concl. Man wolle vorhero diesfals mit ihm communiciren laßen und könnten ihm die Verrichtungen bey der Schule überschicket werden.⁸⁾

クーナウが亡くなってすぐに、市参事会で後任候補として名前が挙がったのは、ファッシュ Johann Friedrich Fasch (1688-1758)、ショット Georg Balthasar Schott (1686-1736)、ロツレ Christian Friedrich Rolle (1681-1751)、レンケ Georg Lenck(e) (1685-1744)、シュタインドルフ Johann Martin Steindorff (1663-1744)、テレマンの6名だった。テレマンは音楽家としては有名だが、トーマス学校の授業（ラテン語含め）を担当してもらえるのが懸念として挙げられた。その発言をしたブラッツ Abraham Christoph Platz (1658-1728)は当時ライブツィヒに3人いた市長のうちのひとり（1705年から在職）で、音楽家としての能力よりも（あるいはそれと同様に）学校教師としての能力を重視していたようだ。なお、1722年7月に任期中だった市長はシュテーター Adrian Steger (1662-1741)（1721年から在職）で、もうひとりランゲ Gottfried Lange (1672-1748)（1719年から在職）も市長だった。当時のライブツィヒでは、3人の市長と3グループ計32人の市参事会員が、1年交代で市政を担当していた。ひとつの参事会グループだけで決められない重要事項につい

8) Glöckner 2018, S. 3 (VIII/A1).

では3人の市長と9人の長老から成るエンゲ・ラート (der Enge Rat、狭い市参事会) が審議し、最重要事項は参事会員全員で決定していた。トーマス・カントルの後任選については、エンゲ・ラートで審議したうえで、全体の承認を得るという手順になった⁹⁾。当時の市参事会はトーマス・カントルの音楽家としての能力を重視する「楽長派 Kapellmeisterpartei」と、学校教師としての働きを重視する「カントル派 Kantorenpartei」に分かれており¹⁰⁾、プラッツとシュテーターは「カントル派」、ランゲは「楽長派」だった¹¹⁾。名前の挙がった6名のうち「楽長派」の候補者がテレマン、ファッシュ、ショット、「カントル派」の候補者がロツレ、レンケ、シュタインドルフだった¹²⁾。このうち最初に試験演奏に招かれたのがテレマンだった。

当時ハンブルク市の音楽監督を務めていたテレマンは、オペラや器楽作品等の作曲家として知られていたのみならず、1701年からライプツィヒ大学で法学を学び、在学中に大学生の演奏団体コレギウム・ムジクムを結成したり、1704年から新教会のオルガニスト兼音楽監督になったりしていたため、ライプツィヒでも知名度が高かった。テレマンは招待を受けて1722年8月1日にライプツィヒに到着し、1722年8月9日にトーマス教会で試験演奏を行った。8月14日の新聞記事には「有名な巨匠テレマン氏 der berühmte Virtuose Msr. Telemann」とあり、歓迎されたことがうかがえる。

Verwichenen Sontag als am 9. dieses hat der berühmte Virtuose Msr. Telemann in der Kirchen zu St. Thomä allhier unter ansehnlicher Frequenz von Hohen und Niederen seine Probe-Music als Cantor mit besonderer Approbation abgelegt. ¹³⁾

9) Siegele 1983, S. 8.

10) バッハの前の前のカントル選出の際 (1677年) にも、音楽の才能を重視するか、教師としての適性を重視するか論争があった。Schulze 2017, S. 23.

11) Siegele 1983, S. 8-9.

12) Siegele 1983, S. 12.

13) Glöckner 2018, S. 3-4 (VII/A2).

テレマンは、8月11日にまずエンゲ・ラートで¹⁴⁾、つづいて同日の参事会全体会議で選出された¹⁵⁾。その際、ラテン語授業の代行について意見が出された記録があるが、音楽家としての名声の高さがまさったようだ。テレマンの音楽が「世界中で知られている wegen seiner Music, in der Welt bekannt」という記述もある¹⁶⁾。

ところが、テレマンは、返事を3か月も保留にした挙句、ハンブルクで400ターラー昇給された¹⁷⁾ことを受けて11月に断りを入れた。ライプツィヒ市が提示した年収額¹⁸⁾を、ハンブルクでの給与値上げ交渉の材料にしたのである。11月20日付の新聞記事には、テレマンがハンブルクに残ることが伝えられ、カントルがまだ空席になっていることが記されている。

Es ist die hiesige Cantor-Stelle zu dato noch nicht besetzt, und weiß man auch nicht, wenn selbige dürfe aufgetragen werden; weil der hierzu berufene Musicus aus Hamburg solche vor dißmahl nicht annimmt, sondern bey seiner vorigen Stelle, wie man nunmehrö höret, verbleibet.¹⁹⁾

1722年11月23日のエンゲ・ラートの議事録によれば、テレマンの辞退を受けて、7名の候補者について検討された。

Wegen Erzezung des Cantor Diensts bey der Thomas-Schule habe man auf Telemannen die absicht gerichtet, der aber entschuldige sich, daß er nicht dimittiret werden wolle, so man dahin stelle u. wie hierunter von

14) 議事録は Glöckner 2018, S. 6, VII/A5。

15) 議事録は Glöckner 2018, S. 6-9, VII/A6-7。

16) Glöckner 2018, S. 10 (VII/A8)。

17) Schulze 2017, S. 28。1ターラーは銀29.2グラムだったというが、現在の銀価格で計算してもうまく換算できないようである。

18) テレマンは、ライプツィヒで1000~1200ターラーの年収を提示されたという。Schulze 2017, S. 46。

19) Glöckner 2018, S. 10 (VII/A9)。

ihm verfahren worden, Sonst hätten sich angegeben

1. der Capellmeister von Merseburg Kauffmann
2. Andr. Christoph Tufen zu Braunschweig
3. Joh. Martin Steindorff von Zwickau
4. Georg Lembke, Cantor von Laucha
5. Joh. Christian Rolle, von Magdeburg,
6. Georg Balthasar Schott
7. Johann Friedr. Fasch, ein geschickter Mensch, Capellmeister von Zerbst.²⁰⁾

「カントル派」のプラッツ市長は、テレマンが断ったのは悲しむにあたらない、音楽だけではなくラテン語の学科授業も考えるべきであると述べ、ファッシュ、ロツレ、トゥーフエン Andreas Christoph Duve (Tufen) (1676-1749) に音楽演奏と学科授業の両方の試験をすることを提案した。シュテーター市長はそれに賛成し、旅費に 20 ターラーを払うことを付け加えた。「楽長派」の参事会員ボルンは、カウフマン Georg Friedrich Kauffmann (1679-1735)、シヨットの名を挙げた。その後、1722 年 11 月 29 日にはカウフマン、ドゥヴェ (トゥーフエン)、シヨットの 3 名の試験演奏が行われた記録がある。カウフマンはメルゼブルクの宮廷楽長、シヨットはライプツィヒ新教会の監督と音楽団体コレギウム・ムジクムの指揮者をしており、3 人のうちドゥヴェのみがカントルであった。1722 年 8 月 31 日にランゲの市長任期が始まっており、いっそう「楽長派」優位で進められている。

In der Leipziger Niclas Kirchen machte am neulichen Sonntage der Herr Capellmeister von Merseburg vor der Predigt seine Probe, nach geendigter Predigt aber ein anderer von Braunschweig, und zur Vesper Msr. Schotte

20) Glöckner 2018, S. 10-11 (VII/A10).

in einer andern Kirchen.²¹⁾

11月29日には、主要礼拝の説教前後にニコライ教会でカウフマンとドゥヴェ、晩課に新教会でショットと1日で3名の試験演奏が実施された。ライブツィヒではクリスマス前の3週間（待降節第2～4日曜日）が礼拝でカンタータ等の奏楽が行われない齋戒期間（Tempus clausum）だったため、その前の待降節第1日曜日にまとめて行ったものと考えられる。しかし、この日の演奏では、候補はしぼられなかったようだ。

市参事会の議事録では、12月21日に初めてバッハの名が、5人の候補者のひとりとして挙げられる。

Diejenigen, so wegen des Cantorats zur probe aufgestellt werden solten, wären letzthin denominiret, es hätten sich noch mehrere gemeldet, als der Capellmeister Graupner in Darmstadt und Bach in Köthen, Fasch aber erklärte sich, daß er nicht mit informiren könne, der Merseburger bitte nochmahls ihn zur probe zu laßen,

Concl. Rolle, Kauffmann, auch Schotte sollen zur probe, insonderheit zum informiren, zugelassen werden.²²⁾

ダルムシュタットの宮廷楽長グラウプナー Christoph Graupner (1683-1760) とケーテンのバッハが追加応募者の例とされている。市参事会としてはツェルプスト楽長ファッシュを第2候補と考えていたが、ラテン語の授業ができないということで候補からはずれ、試験演奏には招かれなかった。カウフマンが再度の試験演奏を希望していることが記されている。12月21日の会議では、ロッセ、カウフマン、ショットを試験、特に学科授業の試験に呼ぶことが決

21) Glöckner 2018, S. 11-12 (VII/A11).

22) Glöckner 2018, S. 12 (VII/A12).

まった²³⁾。ところが12月26日付の新聞記事では、新年の見本市 (Neu-Jahrs-Messe) の頃にグラウプナー、ペッツォルト Christian Petzold (1677-1733)、カウフマンの試験演奏を行うとあり²⁴⁾、メンバーが変わっている。

さらに、試験演奏実施前に、ダルムシュタット宮廷楽長グラウプナーが第1候補に決まったことが1723年1月15日の市参事会の議事録で分かる²⁵⁾。グラウプナーはオペラ作曲家等としても名声が高く、トーマス学校に10代の頃に在籍し、カントルだったクーナウに教えを受け、ライプツィヒ大学の卒業生でもあったため、有力候補と見なされたようだ。ノミネートに先立ち、1722年のクリスマスの晩課に《マニフィカト》を上演することも要請されていた²⁶⁾。1月15日の市参事会では、グラウプナーが雇い主であるヘッセン方伯 (Landgraf) から辞職を認めてもらえるかが問題だと論じられている。グラウプナーは、1月17日に試験演奏を行った。1月20日にはライプツィヒ市参事会からダルムシュタットのヘッセン方伯にグラウプナーの解雇を願う書状が送られている²⁷⁾。並行して、2月2日にはショットの試験演奏が行われた²⁸⁾。

バッハの試験演奏は、2月7日午前にライプツィヒのトーマス教会で行われた。バッハは当時ケーテンの宮廷楽長を務めており、約50km離れたライプツィヒに赴いたのである。この日、《カンタータ第22番「イエスは十二弟子を呼び寄せ Jesus nahm zu sich die Zwölfe」》(BWV 22) と《カンタータ第23番「汝まことの神にしてダビデの子 Du wahrer Gott und Davids Sohn」》(BWV 23) が上演されたことが分かっている。2曲のカンタータは牧師の説教前と聖餐式 (Communio) に分けて上演されたと考えられるが、どちらの曲が説教

23) Neumann und Schulze 1969, S. 119 (Dok. II, Nr. 119).

24) Glöckner 2018, S. 12 (VII/A13). ペッツォルトは、ドレスデンのオルガニストで、通称「バッハのメヌエット」(メヌエット ト長調, BWV Anh. 114) の作曲者である。

25) Glöckner 2018, S. 13-14 (VII/A14). ロッレとバッハの試験も行うべきとある。

26) Wolff 2000, S. 221.

27) Glöckner 2018, S. 14-16 (VII/A16).

28) Glöckner 2018, S. 18 (VII/A18). ショットの試験は新教会で行われたと記事にはあるが、実際はニコライ教会で行われた。

前に演奏されたのかについては、研究者の見解が分かれている。バッハの演奏はハンブルクの新聞で「評価者全員に賞賛された ist ... von allen, welche ... ästimieren, sehr gelobet worden」と記録がある。

Am verwichenen Sonntage Vormittage machte der Hochfürstl. Capellmeister zu Cöthen, Mr. Bach, allhier in der Kirchen zu St. Thomä wegen der bisher noch immer vacant stehenden Cantor-Stelle seine Probe, und ist desselben damahlige Music von allen, welche dergleichen ästimiren, sehr gelobet worden.²⁹⁾

2月8日に旅費として20ターラーの支払いを受けた記録も残っている³⁰⁾。グラウプナーやショットの試験演奏に対しては賞賛の言葉はなく、バッハのほうが評判がよかったようだが、バッハはすぐには選出されなかった。市参事会は、グラウプナーがダルムシュタットの宮廷から辞職許可を得るのを待っていたからである。グラウプナーは、2月7日付の書状で、まだ方伯からの許可が出ないことをライプツィヒ市長ランゲに報告している³¹⁾。

グラウプナーはダルムシュタットで昇給を受け³²⁾慰留されたことを3月22日に報告し、それを受けて4月9日にはエンゲ・ラートでバッハ、カウフマン、ショットの3者について検討された³³⁾。3人とも「楽長派」の候補者であり、トーマス学校での学科授業を担当することができないことが問題視され、「カントル派」のブラッツ市長が「最上の者たちを得られないのだから、中位

29) ライプツィヒの年代記等にも試験の記録はあるが (Dok. II, Nr. 122, 123)、評価については書かれていない。Glöckner 2018, S. 18 (VII/A18) および Neumann und Schulze 1969, S. 91 (Dok. II, Nr. 124)。

30) Neumann und Schulze 1969, S. 91-92 (Dok. II, Nr. 125)。

31) Glöckner 2018, S. 17 (VII/A17)、一部は Neumann und Schulze 1969, S. 92-93 (Dok. II, Nr. 127)。

32) グラウプナーは、ライプツィヒで1000ライヒスターラーの給与を提示されたと報告したようだ。Schulze 2017, S. 47。

33) この議事録は Glöckner 2018, S. 18 (VII/A19)。

の者を採用せねばなるまい da man nun die besten nicht bekommen könne, müße man mittlere nehmen」と述べたことが記録されている。このあとバッハが採用されたことから、「中位の者」というのがバッハのことを指すと解釈されたこともあったが³⁴⁾、このあとには「ピルナのある人についてかつてよい評判をきいたことがある es sey von einem zu Pirna ehmahls viel gutes gesprochen worden」と続く。その後の議事録が残されていない（残さないよう指示されている）ため、詳細については知るすべがないが、ピルナのカントル、クリスティアン・ヘッケル Christian Heckel (1676-1744) を指していたのだとすれば、プラッツは、カントル経験者で学科授業も担当できる人を選び直そうと提案したのではないかと考えられる。プラッツが、音楽家としての能力だけでなく、学校教師としての能力を重視していたためである。しかし、クーナウが亡くなってすでに10か月以上が経過しており、トーマス・カントルが長らく空席になっていることは複数の資料で言及されていることから、一からの選び直しには反対が出たのではないだろうか。

そして、バッハが第1候補となった。4月19日には、ライプツィヒで仮の契約を結び、3週間、遅くとも4週間以内にケーテン宮廷から辞職の許可を得ると記している。この書面には、規則を遵守すること、生徒たちに時間外のレッスン（歌唱）を行うこと、ラテン語の授業を他者に委ねる場合には自分で費用を払うことなども記している。

... nicht alleine in denen darzu gehörigen ordentlichen Stunden, sondern auch privatißime im Singen ohne Entgelt informiren, und was mir sonst darbey zu thun obliegt, alltenthalben gebührend verrichten, nicht weniger, daferne, jedoch mit vorbewust und Bewilligung E. E:

34) 2023年4月22日付の記事 (<https://www.mdr.de/kultur/leipzig-bach-thomaskantorwahl-jubilaecum-100.html>) でもこの言葉が引用され、ライプツィヒ市参事会の名誉救済のために (zur Ehrenrettung des Leipziger Rats) バッハはそれまで教会音楽家としては目立つ存在ではなかったと説明されているので、バッハをこの「中位の者」ととっていることが分かる。

Hochweisen Raths, zu meiner sublevation beym informiren in der Lateinischen Sprache jemand erfordert werden solte, denselben aus meinen eigenen Mitteln ohne von E. E. Hochweisen Rathe, ...³⁵⁾

バッハは当時の雇い主であったケーテンの侯爵に解雇をすでに願い出ており、ケーテン侯爵からは4月13日付で解雇承諾の書状³⁶⁾が書かれ、発送済みであった。ライプツィヒ市参事会全体会議での4月22日の投票により、バッハはトーマス・カントルに選出された³⁷⁾。議事録によれば、まずランゲ市長がテレマン、グラウプナーに断られた経緯を説明し、残る候補がバッハ、カウフマン、ショットであることを確認した。カントル職には音楽だけでなく学校での授業もあるが、バッハは学校の授業についてもはっきりさせた (erklärt)³⁸⁾ので、バッハを選出するかどうか決めようと述べている。プラッツ市長はケーテンから解雇されることを条件とし、シュテーター市長も反対しないとした。他の参事会員たちは、多少の意見を述べつつもみなバッハに投票した。トーマス・カントルは教会付属学校の教職員となるため、本来は教会当局と相談してカントルは選出すべきところだが、市参事会が先行してバッハに決定したことが分かる。

バッハは、5月5日には正式な契約をかわした³⁹⁾。そのなかで「6. 教会が不必要な支出をしなくて済むよう、少年たちに声楽だけでなく楽器も熱心に教える」、「7. よき秩序を保つよう、教会においては音楽が長すぎぬよう、オペラ的にならず聴く者を祈りに導くよう、音楽を整える (einrichten)」、「12. 施政担当の市長の許可を得ずに市を離れない」など14項目の誓約を行っている。そ

35) Neumann und Schulze 1963, S. 175-176 (Dok. I, Nr. 91).

36) Neumann und Schulze 1969, S. 93 (Dok. II, Nr. 128).

37) この議事録は Glöckner 2018, S. 19-22 (VII/A20-21), Neumann und Schulze 1969, S. 93-98 (Dok. II, Nr. 129-130).

38) 自費で代理人を雇うことが認められた。

39) Glöckner 2018, S. 22-23 (VII/A22), Neumann und Schulze 1963, S. 177-178 (Dok. I, Nr. 92).

の後、5月7日または8日に、ライプツィヒ大学神学教授のシュミット Johann Schmid (1649-1731) と教会教区監督のダイリング Salomon Deyling (1677-1755) にラテン語で神学知識の試験を受けた。その試験結果を伝える書類としては、日付なしのラテン語のもの⁴⁰⁾と、5月8日付のドイツ語のもの⁴¹⁾とが伝わる。バッハは子どもの頃にラテン語学校で優秀な成績をおさめていた(父母が亡くなった年を除く)。この神学教授シュミットは採点が厳しく、他都市のカントル候補を何人も不合格にしたことで有名だったが、バッハについては受け答えが適切で、トーマス・カントルに適任であると判定した。ただ、ダイリングは、この神学試験に先立って市参事会がバッハの採用を決定していたことに異議を唱えた⁴²⁾。

以上が、かなり錯綜したトーマス・カントル選出の経緯である。伝統的なカントルは、学校教師として音楽とラテン語の授業を行う立場であり、「カントル派」の市参事会員は学科授業をも担当してくれる人物を選出したいと考えていた。だが、そもそも試験演奏に呼ばれた顔ぶれを見ても、「楽長派」の人物がほとんどであり、ランゲ市長をはじめとする「楽長派」が優位に選考を進めていたことがうかがえる。ライプツィヒは見本市の都市として発展をとげていたところであり、年3回(春の復活祭後、秋のミカエル祭、新年)の見本市の時期には多くの市外からの来訪者が教会礼拝にも出席することから、優れた音楽家を選んで対外的にアピールしたいというねらいもあったのではないか。「カントル派」の市長と「楽長派」の市長ではバッハに対する見方が異なり、このあとのライプツィヒ在職中、「カントル派」の市長が施政を担当した期間には、バッハは何かとやりにくい思いをすることもあった。

この選考の過程でまず選ばれたのはテレマン、次がグラウプナーである。現代から見ると、バッハは「音楽の父」であり、ドイツ音楽史上、非常に重要な音楽家である。そのようなバッハがライプツィヒの職に第1候補として選ばれ

40) Neumann und Schulze 1969, S. 99-100 (Dok. II, Nr. 134).

41) Neumann und Schulze 1969, S. 100 (Dok. II, Nr. 135).

42) Wolff 2000, p. 242.

たわけではないことは意外性があるためか、本年書かれた記事には「第3の選択 dritte Wahl」という見出しのものも少なくない⁴³⁾。テレマンとグラウプナーは1722年以前にいくつものオペラを書いており、器楽出版曲集も出すなど、広く名前が知られていた。それに対し、バッハは亡くなるまでオペラを書くことはなく、1722年時点では出版曲集もなかった⁴⁴⁾。こういった知名度の違いに加え、テレマンもグラウプナーもライプツィヒ大学の卒業生であったことから、ライプツィヒのことがよく分かっている人物が望ましいとされた面もあるのだろう。

2. ライプツィヒ着任

トーマス学校における1年の始まりは、聖霊降臨祭（ペンテコステ）だった。キリスト教の三大祝祭のひとつである聖霊降臨祭は移動祝日であり、1723年は5月16日だった。本来であれば5月16日までの着任をバッハは求められていたようだ。4月19日の書面で4週間以内の着任を約束しているが、その4週間の期限が5月17日だった。トーマス・カントルは聖霊降臨祭にライプツィヒ大学教会の礼拝で演奏することになっており、バッハがこの日のために作曲した《カンタータ第59番「われを愛する者は、わが言葉を守らん *Wer mich liebet, der wird mein Wort halten*」》(BWV 59) が伝わる。ただ、バッハが1723年に実際に上演にたずさわったかどうかは分かっていない⁴⁵⁾。

43) た と え ば „Dritte Wahl: Wie Bach zum berühmtesten Leipziger Thomaskantor wurde.“ (<https://www.mdr.de/kultur/leipzig-bach-thomaskantor-wahl-jubilaum-100.html>)、 „Nur dritte Wahl vor 300 Jahren: Bach wird Thomaskantor.“ (<https://www.swr.de/swr2/musik-klassik/nur-dritte-wahl-vor-300-jahren-bach-wird-thomaskantor-100.html>)。

44) ミュールハウゼン市参事会交代式用の《カンタータ第71番「神はわが王 *Gott ist mein König*」》(BWV 71、1708年初演)の楽譜が印刷されたことが知られるが、流通するようなものではなかった。なお、ランゲ市長はドレスデンでバッハの鍵盤楽器演奏を聴いたことがあり、市参事会でもバッハの卓越した演奏に言及した。Glöckner 2018, S. 21。

45) このカンタータが1724年に演奏されたことは確実視されている。

バッハが実際にライプツィヒに転居してきたのは5月22日である。この日の正午頃、まずは4台の荷車で家財が届く。そして午後2時頃、バッハ一家がライプツィヒに到着し、改装工事の終わった住居に入居したと新聞に伝えられている⁴⁶⁾。バッハの住居（官舎）はトーマス学校とつながっており、3つのフロアと地下室がある大きなもので、「作曲部屋」と呼ばれる部屋には大きな棚があり、前任者から受け継いだ楽譜やバッハの楽譜が収納されていた。多額の費用（100ターラーほど）をかけて入居前に改装工事が行われたことを、バッハは誇らしく思っただろう。その家に入居したのは、バッハと2人目の妻アンナ・マクダレーナ Anna Magdalena Bach (1701-1760)、1人目の妻の姉で家事を手伝っていたフリーデレーナ Friedelena Margaretha Bach (1675-1729) と5人の子どもたちであった。

転居の約1週間後、三位一体後第1日曜日にニコライ教会にて、バッハは初めて礼拝音楽を担当する。演奏したのは《カンタータ第75番「貧しい者は食し Die Elenden sollen essen」》(BWV 75) という、2部構成全14楽章の堂々とした作品だった。このカンタータの第1曲はフランス序曲のリズムで始まる。フランス序曲はもともとオペラやバレエ音楽の冒頭に置かれ、フランス王の入場音楽とされていたもので、付点リズムを特徴とするゆっくりした部分に急速なフーガが続く形式をとる。バッハは、このフランス序曲形式を、何かのはじまりを示す意味でよく用いた。たとえば、待降節第1日曜日用の《カンタータ第61番「いざ来たれ、異邦人の救い主 Nun komm, der Heiden Heiland」》(BWV 61、1714年初演)の冒頭楽章に置かれたフランス序曲は、教会暦の1年の始まりを告げる。バッハが、みずからのライプツィヒでの仕事始めをフランス序曲で飾ったことは象徴的だ。また、このカンタータでは3つの楽章（第7、8、14曲）でルター派の讃美歌『神の御業は豊かな恵み（神の御業はすべて善し） Was Gott tut, das ist wohlgetan』が演奏される。ライプツィヒ第1作でこの神信頼の讃美歌を選んだのは、ライプツィヒの教会音楽の

46) Neumann und Schulze 1969, S. 104 (Dok. II. Nr. 138).

責任者としてバッハを招いた神への信頼、ケーテン宮廷楽長を辞して転職した選択を善いものとしてくださいと願うバッハの気持ちのあらわれかも知れない。このカンタータの演奏を担当したのは13~23歳の16人以下のトーマス学校生徒から成る合唱隊⁴⁷⁾、少数の町楽士と大学生の器楽奏者であり、バッハがそれまで勤めていたケーテン宮廷の楽団のように名手がそろっていたわけではない。どれほどの演奏レベルだったのかは分からないが、「喝采を受けた mit guten applausu」とライブツイヒ大学の記録に伝えられる。

Den 30. dito als am 1. Sonnt. nach Trinit. führte der neue Cantor u. Collegii Musici Direct. Hr, Joh. Sebastian Bach, so von dem Fürstl. Hofe zu Cöthen hierher kommen, mit guten applausu seine erste Music auf.⁴⁸⁾

そのほかハンブルクの新聞 (Dok. II, Nr. 140) やライブツイヒの年代記 (Dok. II, Nr. 141) にもこの日の演奏についての記録があり、注目された出来事だったことがうかがえる。トーマス・カントルは、トーマス学校に4つあった合唱隊のうち精鋭が集まる第1合唱隊を率いて、市内の2つの主要教会だったニコライ教会とトーマス教会で交互に奏楽を行っていた。翌週の日曜日、1723年6月6日にはバッハはトーマス教会で初めてカンタータを上演した。この日に演奏された《カンタータ第76番「天は神の栄光を語り Die Himmel erzählen die Ehre Gottes」》(BWV 76) も2部構成全14楽章の堂々とした作品である。通常の教会カンタータには5~7楽章程度の作品が多いことを考えると、14楽章もの作品を2週続けて上演したことからは、バッハのライブツイヒでの職務に対する意気込みが感じられる。

1723年6月1日に、バッハはトーマス学校の生徒たちに新しいカントルと

47) Maul 2023, S. 22.

48) Neumann und Schulze 1969, S. 104 (Dok. II, Nr. 139). Collegii Musici Direct. は、Director musices のことと考えられる。バッハが、コレギウム・ムジクムの指揮者に就任したのは6年後の1729年だった。

して正式に紹介された。そのときの記録を読むと、教区監督のダイリンクが選考プロセスに異議を唱えて欠席し、式のなかでも教会と市参事会の間でひと悶着あったことがうかがえる⁴⁹⁾。トーマス学校には、音楽奉仕を行う寄宿生が55名と、その倍までの数の外部生（自宅通学）とがいた。1723年6月14日の記録⁵⁰⁾によれば、当時12歳だった長男のフリーデマンはトーマス学校の3級 *tertia* に、9歳だった次男のカール・フィーリップ・エマヌエルは5級 *quinta* に、いずれも外部生として入学した。当時のトーマス学校の生徒は男子だけであり、一般に礼拝で女性が歌うことは禁じられていたため（女子修道院等を除く）、教会音楽では少年や男性歌手が高声部も担った。

ライプツィヒでのバッハは、着任当初はほぼ毎週、新しいカンタータを作曲し、パート譜を作成し、生徒たちと練習して日曜の礼拝にのぞむという、大変に忙しい日々を送った。学校教師としては、校長・副校長につぐ3番目のポジションで、週7時間、音楽の授業を行った（月火水の9時、12時、金曜日の12時から⁵¹⁾。音楽の授業を受ける生徒は12～23歳の150人ほどおり（当時の変声期は17～18歳だった）、4人の助^{プレフェクト}手を使っての授業だったようだ。それ以外にも音楽のレッスンを行ったようだが、ラテン語授業はお金を払って代行させた。

バッハが監督して毎週日曜日（器楽を伴う多声音楽が演奏されない「齋戒期」を除く）や祝祭日の礼拝に音楽を提供したのは市内4教会（トーマス教会、ニコライ教会、新教会 [マタイ教会]、ペテロ教会）だが⁵²⁾、大学教会（パウロ教会）では年4回の祝日のみ演奏を担当し、別に謝礼を得ていた。演奏を担当した生徒たちとの関係では、生徒たちが演奏時に分かるようなミスをする^{と1グロッシェン、意図的なミスやいたずらで間違えると3グロッシェン（当時、1グロッシェンでビールが約2リットル買えた）の罰金を科していたそう}

49) Neumann und Schulze 1969, S. 106–112 (Dok. II, Nr. 143–148).

50) Neumann und Schulze 1969, S. 112 (Dok. II, Nr. 149).

51) 校長は週15時間、副校長は17時間の授業を担当した。そのほかに寄宿生の指導もあった。Wolff 2000, pp. 247–248.

52) 第2～4合唱隊はプレフェクト（副指揮者）が率いた。

で⁵³⁾、いたずら盛りの少年たちに何とか言うことをきかせようとしていたのがうかがえる。

教会当局と市参事会の見解の相違、市参事会のなかでの見解の相違、いたずら好きで言うことをきかない生徒たち、のちに生じる校長とのトラブルなど、ライブツィヒでのバッハには苦労が多かった。ライブツィヒ時代には多くの作品が書かれ、生産的ではあったが、こういった苦労もあったことを2023年5月29日付『ライン新聞 Rheinische Post』はバッハのライブツィヒに対する「愛憎 eine Hassliebe」という言葉でまとめている⁵⁴⁾。

3. 転職の目的

バッハがライブツィヒに移るまで勤めていたケーテン宮廷は、音楽好きでみずから楽器も演奏する侯爵のもとと優秀な音楽家が集まっており、バッハの待遇もよかった。バッハはケーテンで400ターラーの年俸を得ており、妻もソプラノ歌手として給与を得ていたので、世帯収入は770ターラーだったという。一方、ライブツィヒでの固定給はわずか100ターラーほどで⁵⁵⁾、1730年に10代の頃からの友人エルトマン Georg Erdmann (1682-1736) に書いた書状⁵⁶⁾によれば、葬式・結婚式等での演奏謝礼等の追加収入をあわせても700ターラー位だったという。バッハは、合計1000ターラーほどの収入を期待していたが⁵⁷⁾、

53) Wolff 2000, p. 250. 生徒たちが結婚式や葬儀で歌うともらえる演奏料から罰金を引いて渡していた。

54) https://rp-online.de/kultur/vor-300-jahren-kam-bach-als-thomaskantor-nach-leipzig_aid-90847669

55) 市からの給与が87ターラー12グロッシェン、薪代が13ターラー3グロッシェン。そのほかに諸手当が加算される。Neumann und Schulze 1969, S. 335-336 (Dok. II, Nr. 435). 1723年には、5月15日付で100ターラー、9月13日付で37ターラー、12月14日付で68ターラーの領収書を書いており、受け取った諸手当込みの金額は215ターラーである。1724年には3月6日に100ターラー、6月5日に131ターラー、9月18日に43ターラー、12月18日に74ターラー受け取っており、合計は338ターラー。Neumann und Schulze 1969, S. 102-103 (Dok. II, Nr. 137).

56) Neumann und Schulze 1963, S. 67-68 (Dok. I, Nr. 23).

57) Wolff 2000, p. 383.

届かなかったようだ。とはいえ、住居代はかからず、現物支給もあった。なお、バッハの給料はライプツィヒ市で12番目に多く、市長でさえバッハの倍額しかもらっていなかったという。社会的地位としては、当時の社会においてはカントルより宮廷楽長のほうが高く見られていた。固定給が減少し社会的地位が低下したにもかかわらず、バッハがライプツィヒに転職したのはなぜだろうか。

その理由は大きく分けて2つ考えられる。まずは、宗教上の理由である。バッハは敬虔なルター派信徒だったが、ケーテンで仕えていた侯爵レオポルト Leopold, Fürst von Anhalt-Köthen (1694-1728) はカルヴァン派であった。ケーテン侯爵の母がルター派信者であり、ケーテンにもルター派教会はあったが、ケーテン時代にはルター派教会音楽を書くことは職務には含まれなかった。ケーテン時代の作品としては《ブランデンブルク協奏曲》(BWV 1046～1051、1721年献呈)をはじめとする器楽作品や祝賀機会のための世俗カンタータ等が知られる。バッハは、1708年にミュールハウゼンのオルガニストを辞してヴァイマルに移ったときに、「神の栄光のために整った教会音楽を上演」することが究極目的だと記した⁵⁸⁾。実際、ヴァイマルでは1714年の楽士長着任後は4週間に1曲の礼拝用カンタータの作曲・上演を担当するようになった。その後、ケーテンではルター派音楽の作曲から離れることになってしまい、再び教会音楽を主な職務とする仕事につきたいという思いがあったのではないだろうか。バッハがルター派の信仰に篤かったことは、ルター関係の神学蔵書が多かったこと、ルターの作詞・作曲した讃美歌を作品に多くとり入れたことなどから明らかである⁵⁹⁾。

2つめは子どもの教育である。ケーテンにはよいラテン語学校も、大学もなかった。ケーテンのルター派学校では、117人もの生徒がひとつの教室にひし

58) Neumann und Schulze 1963, S. 19-21 (Dok. I, Nr. 1). „Wenn auch ich stets den Endzweck, nemlich eine regulirte kirchen music zu Gottes Ehren ... gerne aufführen mögen ...“

59) 木村、2020年。

めきあっている状況だったという⁶⁰⁾。長男が12歳となっており、まずはよいラテン語学校に通わせたいとの思いがあったのではないだろうか。そして、バッハ自身は9歳のときに両親をなくしてしばらく長兄のもとに身を寄せたあと15歳で自活したため、大学に通うことができなかった。そのために不利だと感じることもあったようで⁶¹⁾、息子たちにはぜひ大学教育を受けさせたいと考えていたのだろう。ライプツィヒに移って間もなく、長男のライプツィヒ大学入学を予約している。

ライプツィヒは1700年頃から商業が発展し、1730年代までには9つもの銀行が設立されて、ブルジョワが大きな屋敷を建てるようになっていた⁶²⁾。市を取り囲む壁の外には、フランス式の造園術をとり入れた庭園がつくられ、見本市に多くの客が訪れる都市だった。単に経済的に豊かな街というだけでなく、ドイツでも有数の歴史の長い大学（1409年創設）があることが、ライプツィヒの都市像に影響していた。絵画や音楽に関心をもつ市民も多く、大学生を中心とする演奏団体コレギウム・ムジクム2つ（1680年代以前からあったものと、1701年にテレマンが創設したもの）が毎週コーヒーハウスで定期演奏会を行うなど、活気があったようだ。そのような都市に移ることが、息子たちにとってもよい環境で暮らせることになると考えたのだろう。

4. ライプツィヒ転職がもたらしたもの

バッハがライプツィヒに転職せず、ケーテンにとどまっていたらどうなっていたらだろうか。ケーテン侯爵はみずからも楽器を演奏するなど音楽好きで、バッハは上述のエルトマン宛の書状でそこで生涯を終えるつもりだったと記し

60) Wolff 2000, p. 219.

61) ただし、バッハの前任者クーナウはライプツィヒ大学の出身だったが、仕事のうえで様々な対立・トラブルがあったと伝えられるため、バッハ自身が感じていたほど学歴による有利・不利はなかったのかも知れない。なお、16~19世紀のトーマス・カントルで、大学を卒業していなかったのはバッハだけだった。

62) Wolff 2000, p. 239.

ている⁶³⁾。

Daselbst hatte einen gnädigen und Music so wohl liebenden als kennenden Fürsten; bey welchem auch vermeinte meine Lebenszeit zu beschließen.⁶⁴⁾

バッハはケーテン侯爵に対し、おそらく子どもの教育などを理由として転居の許可を願い出たのではないだろうか、侯爵は好意的に受け入れ、ライプツィヒに移ってからケーテン宮廷楽長の称号を使い続けることをゆるした。バッハの側も、転職後もケーテンに演奏に赴いたり、1726年には侯爵の息子の誕生を祝って鍵盤楽器のための《パルティータ第1番 変ロ長調》(BWV 825)を献呈したりした。だが、侯爵はバッハの在職中から体調の悪いときがあったようで、1728年に33歳の若さで亡くなってしまふ。その葬儀でもバッハは葬送音楽を演奏した。侯爵の死後はケーテンでの音楽活動は停滞したため⁶⁵⁾、いずれにせよ1728年時点で、バッハは転職を余儀なくされたであろう。ライプツィヒでの職は、領主の事情に関係なく継続できるものであり、1723年に安定した職に転職したのは先見の明があったと言えるかもしれない。

バッハの息子たちのうち、長男フリーデマンは1729年3月5日にライプツィヒ大学に登録し、法学・哲学・数学などの講義を受けた。次男エマヌエルは1731年にライプツィヒ大学に入学し、1734年にはフランクフルト・アン・デ

63) 1721年12月にフリーデリケ・ヘンリエッテ Friederike Henriette von Anhalt-Bernberg (1702-1723) と結婚して以来音楽熱が冷めたことに言及されることが多いが、彼女はバッハが転職を決める前の1723年4月4日に亡くなった。1722年からケーテン宮廷での音楽予算が削減されているのは (Wolff 2000, p. 203)、侯爵の軍事支出が増えるなどの理由が影響していたと考えられる。侯爵は1725年に再婚した。

64) Neumann und Schulze 1963, S. 67-68 (Dok. I, Nr. 23)。

65) 侯爵亡きあと、弟のアウグスト・ルートヴィヒ August Ludwig, Fürst von Anhalt-Köthen (1697-1755) が後継者となったが、レオポルトの1人目の妻の娘や2人目の妻が高額な遺産分割を要求し、侯国の会計は赤字となった。

ア・オーデルの大学に移籍した⁶⁶⁾。息子たちによる教育を受けさせたいというバッハの願いは、ライプツィヒ転職によって叶えられたと言える。

ルター派の教会音楽にたずさわるとい点では、ライプツィヒでバッハはおよそ1500回にもものぼる教会での演奏を行った。礼拝用の教会カンタータを150曲ほど作曲したのみならず、《ヨハネ受難曲》(BWV 245、1724年初演)、《マタイ受難曲》(BWV 244、1727年初演?)、《クリスマス・オラトリオ》(BWV 248、1734/5年初演)などのオラトリオ、《ミサ曲 口短調》(BWV 232、第1部は1733年作曲、第2~4部は晩年に完成)をはじめとするラテン語教会音楽など、多くを残した。バッハがライプツィヒの職につかなければ、書かれることがなかったろう作品が多い。また、トーマス学校で教育活動を行ったからこそ、バッハの作品、とりわけバッハが名手として知られていた鍵盤楽器のための作品が弟子たちによって伝承されたのだろう。たしかにバッハは若い頃から個人指導は行っていたが、ライプツィヒで多くの生徒を教育したことの重要性ははかりしれない。こういった教育活動は、19世紀にバッハ復興運動がおこる源になったと考えられる。このような面からも、バッハがライプツィヒに転職したことは、その後の音楽史にとっても大きな意味をもっていたと言える。

引用文献

- Glöckner, Andreas. „Das Thomaskantorat vor Bachs Amtsantritt: Zu Tradition und Geschichte seit der Reformation.“ In *Die Welt der Bach Kantaten*, Band 3, hrsg. von Christoph Wolff und Ton Koopman, Weimar: Metzler und Kassel: Bärenreiter, 1999, S. 37–50.
- Glöckner, Andreas. *Dokumente zur Geschichte des Leipziger Thomaskantorats 2: Vom Amtsantritt Johann Sebastian Bachs bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts*. Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2018.

66) 成人した息子たちのうち、ゴットフリート・ハインリヒ Gottfried Heinrich Bach (1724–1763) は精神障がいがあったと考えられる。ヨハン・クリストフ・フリードリヒ Johann Christoph Friedrich Bach (1732–1795) はライプツィヒ大学で法学を学んだと考えられるが、証拠がない。末息子のクリスティアン Johann Christian Bach (1735–1782) は15歳のときに父が亡くなったため、大学に通うことができなかった。

- Maul, Michael. „Damals vor 300 Jahren. Teil 12: Bachs Antrittsmusik als Thomaskantor.“ In *Mitteilungsblatt No. 92* (Sonderedition für die Neue Bachgesellschaft e.V., *bach magazin* Heft Nr. 41, Spring/Sommer 2023) : 22-23.
- Neumann, Werner und Hans-Joachim Schulze. *Schriftstücke von der Hand Johann Sebastian Bachs, Kritische Ausgabe*. Kassel et al: Bärenreiter, 1963. (Bach-Dokumente Band I) (Dok. I と略す)
- Neumann, Werner und Hans-Joachim Schulze. *Fremdschriftliche und gedruckte Dokumente zur Lebensgeschichte Johann Sebastian Bachs 1685-1750: Kritische Gesamtausgabe*. Kassel et al: Bärenreiter, 1969. (Bach-Dokumente Band II) (Dok. II と略す)
- Sailer, Till. *Wie Bach Thomaskantor wurde*. Zürich und Mainz: Atlantis Musikbuch, 2000.
- Schulze, Hans-Joachim. *Bach-Facetten*. Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2017.
- Siegele, Ulrich. „Bachs Stellung in der Leipziger Kulturpolitik seiner Zeit.“ In *Bach-Jahrbuch*, 69. Jahrgang 1983: 7-50.
- Siegele, Ulrich. “Bach and the domestic politics of Electoral Saxony.” In *Cambridge Companion to Bach*, ed. by John Butt, Cambridge: Cambridge University Press, 1997, pp. 17-34.
- Wolff, Christoph. *BACH: Essays on His Life and Music*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1991.
- Wolff, Christoph. *Johann Sebastian Bach: The Learned Musician*. New York: W. W. Norton & Company, 2000.
- 木村佐千子 「J.S. バッハの作品におけるルターの賛美歌」『音楽学』66巻1号(2020年) : 16-34。

Zusammenfassung

Wie und warum J.S. Bach vor 300 Jahren Thomaskantor wurde

Sachiko Kimura

Im Jahr 2023 jährte sich der 300. Jahrestag des Amtsantritts Johann Sebastian Bachs 1723 als Director musici und Thomaskantor in Leipzig. Es wurde eine wissenschaftliche Konferenz darüber abgehalten und viele Artikel erschienen, die sich auf Bachs Ankunft in Leipzig konzentrieren. Dieser Beitrag diskutiert den Prozess seiner Wahl zum Thomaskantor, die Situation bei seinem Antritt, die Gründe für seinen Stellenwechsel und die daraus resultierenden Konsequenzen.

Ein Schlüsselbegriff in Bezug auf Bachs Auswahl zum Thomaskantor ist „die dritte Wahl“. Dies liegt daran, dass sich der Leipziger Rat zuerst für Georg Philipp Telemann und dann Johann Christoph Graupner entschieden hatte und Bach erst nach deren Absagen ausgewählt wurde. Es wird vermutet, dass Telemann und Graupner den Vorzug erhalten hatten, weil sie zu dieser Zeit als Musiker, besonders als Opernkomponisten bekannter waren und an der Universität Leipzig studiert hatten. Dieser Auswahlprozess wird in Kapitel 1 anhand von zeitgenössischen Dokumenten überprüft.

Kapitel 2 behandelt die Kantaten, die Bach unmittelbar nach seinem Amtsantritt aufführte. Sie weisen darauf hin, dass Bach seine Tätigkeit in Leipzig mit großem Enthusiasmus begann. Es gab jedoch auch zahlreiche Schwierigkeiten bei seiner Arbeit in Leipzig, wobei ein Artikel sogar von einer „Hassliebe“ spricht.

Kapitel 3 reflektiert die Gründe für Bachs Stellenwechsel nach Leipzig. Die Arbeitsbedingungen in Köthen, wo er zuvor tätig gewesen war, waren gut. Der Wechsel nach Leipzig bedeutete eine Verringerung des Jahresgehalts und einen sozialen Abstieg. Es wird argumentiert, dass Bach sich dennoch für einen Stellenwechsel entschied, weil er 1) an einem Ort arbeiten wollte, an dem er regelmäßig lutherische Kirchenmusik aufführen konnte, und 2) aus Gründen der Bildung seiner Kinder.

In Kapitel 4 wird überlegt, welche Folgen Bachs Stellenwechsel nach Leipzig hatte. Der Fürst von Köthen starb 1728, und die musikalische Aktivität in Köthen kam zum Stillstand. In diesem Sinne war es weitsichtig von Bach, eine stabile Position in der Stadt Leipzig anzunehmen. Außerdem konnte er seine Söhne auf eine gute Lateinschule und Universität schicken. Darüber hinaus trug die Tatsache, dass er viele Schüler an der Thomasschule unterrichtete, dazu bei, dass Bachs Werke an künftige Generationen weitergegeben wurden, was sich auf die spätere Musikgeschichte auswirkte.